



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究(第2年次): 国語科の新しい授業づくりのための実践と研究(プロジェクト研究) |
| Author(s) | 大熊, 徹; 笠井, 正信 |
| Citation | 東京学芸大学附属学校研究紀要, 36: 1-13 |
| Issue Date | 2009-06-00 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/105227 |
| Publisher | 東京学芸大学附属学校研究会 |
| Rights | |

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究（第2年次）

— 国語科の新しい授業づくりのための実践と研究 —

東京学芸大学附属国語教育講座 大熊 徹
東京学芸大学附属世田谷中学校 笠井 正信

目 次

| | | |
|--|-----------|----|
| 1. はじめに | 笠井 正信 | 2 |
| 2. 研究の内容 | | |
| 2. 1 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』のイメージ図の作成 | 福田 淳佑 | 3 |
| 2. 2 古典学習の授業実践研究 | | |
| 2. 2. 1 中学校における研究の現状と課題 | 野中三恵子 | 4 |
| 2. 2. 2 高等学校における研究の現状と課題 | 宇佐見尚子 | 4 |
| 2. 2. 3 高校での古典学習の実践報告と課題 | 杉本 紀子 | 4 |
| 2. 2. 4 実践の課題と今後の展望 | 黒石 陽子 | 5 |
| 2. 3 現代文（文学・批評・論説）学習の授業実践研究 | | |
| 2. 3. 1 文章を比較する「情報の取り出しと枠組み」 | 渡邊 裕 | 6 |
| 2. 3. 2 批判的に読む－クリティカル・リーディングのすすめ－ | 仁野平智明 | 6 |
| 2. 3. 3 「ホロコースト」の表象 | 若宮 知佐 | 6 |
| 2. 3. 4 詩を味わう～萩原朔太郎「純情小曲集」 | 扇田 浩水 | 7 |
| 2. 3. 5 文学者にとっての文学とは何か | 鈴木 芳明 | 7 |
| 2. 3. 6 現代文（文学・批評・論説）学習において検証すべき問題点 | 千田 洋幸 | 7 |
| 2. 4 言語生活・言語体系の学習に関する授業実践研究 | | |
| 2. 4. 1 帰国学級における日本語教育について | 中村 和弘 | 8 |
| 2. 4. 2 帰国学級における群読 | 岩浅 健介 | 8 |
| 2. 4. 3 帰国学級における「話す」・「聞く」 | 表 賢司 | 9 |
| 2. 4. 4 まとめと課題 | 浅田 孝紀 | 10 |
| 2. 5 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての授業実践研究 | | |
| 2. 5. 1 研究の方向 | 笠井 正信 | 10 |
| 2. 5. 2 世田谷小学校における読書ノートの取り組み | 福田 淳佑 | 11 |
| 2. 5. 3 ORNの追加機能（オンライン読書ノート） | 宮寺庸造・鍋島尚子 | 11 |
| 2. 5. 4 ORN（オンライン読書ノート）を使った中学校の実践 | | |
| 2. 5. 4. 1 1年生での学習 | 野中三恵子 | 12 |
| 2. 5. 4. 2 2年生、3年生での学習 | 扇田 浩水 | 12 |
| 3. 今年度の成果と今後の課題 | 大熊 徹 | 13 |

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究（第2年次）

— 国語科の新しい授業づくりのための実践と研究 —

研究代表者 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹 附属世田谷中学校 笠井 正信
研究同人 千田洋幸、黒石陽子、山田有策、佐藤正光、北澤 尚、石井正己、宮寺庸造、中村和弘
(東京学芸大学)、木下ひさし(成蹊小学校)、小山恵美子(東京女学館小学校)、福田淳
佑、吉岡裕子(附属世田谷小学校)、中山美由紀(附属小金井小学校)、浅見優子、岡島玲
子(附属竹早小学校)、岩浅健介、表賢司(附属大泉小学校)、扇田浩水、鍋島尚子、野中
三恵子、村上恭子、渡邊裕(附属世田谷中学校)、石川直美(附属大泉中学校) 愛甲修子、
工藤哲夫、杉本紀子、西村 諭(附属国際中等教育学校)、浅田孝紀、宇佐見尚子、佐久間
俊輔、鈴木芳明、中山 至、仁野平智明、藤 千恵、若宮知佐(附属高等学校)、田村智恵
(東京都立淵江高等学校)

1. はじめに

1. 1 研究の目的

本研究の研究主題は「国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究」である。本年度はその研究の第2年次にあたる。また本研究は、附属学校教員及び外部私立学校教員と大学の教科教育及び教科専門科目担当教員との連携を図り、実践と理論の統一を図ることが大きなねらいである。

1. 2 研究の進め方

第1年次における「国語力の分析」「教師の授業作り」に関わる基礎的な研究をふまえ、第2年次は国語科カリキュラムづくりのための実践とその検討を行うことにした。国語力の向上は国語科だけでなく学校全体のカリキュラムとして構想する必要がある。読む力や書く力などの基本的な力をふまえ、国語による論理的な思考力や想像力などの関連性をモデル化していこうとしている。各グループごと(目標論的な追究のグループ、内容論的な追究のグループ(文学や評論などを読むこと、古典などの言語文化の学習、言語生活や言語体系の学習に分かれて)、方法論的な追究のグループ)で実践とその検討を行ってきた。

1. 3 授業づくりの新しい視点の検討

言語技術だけ、作品だけという従来型の国語教育観から学び手を支える「授業」の発想のもとに授業づくりのシステムを検討する。

1. 4 今後の方向

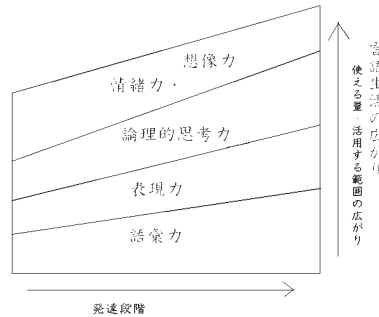
今後は、特に教師の力量が問われる。本研究を教員養成や現職研修のカリキュラムに関連づけることをめざしたい。そのためには国語科の教科構造を明確にし、授業づくりやカリキュラム開発に生かせるようにし、教師の授業づくりの力の向上を図ることで教員養成カリキュラムとの関連を図ることになる。

(附属世田谷中学校 笠井正信)

2. 研究の内容

2. 1 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』のイメージ図の作成

昨年度、平成16年2月3日に出された文化審議会答申の中で、『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』として示されたイメージ図をもとに、独自のイメージ図を作成し（図1）、発達段階に応じた効果的な指導のあり方を考えた。

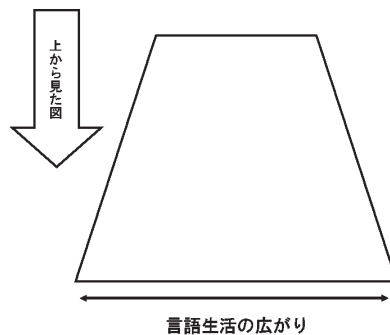


(図1) 昨年度本研究会で作成したもの

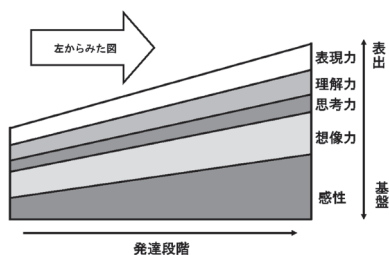
今年度は、研究の成果から（図1）を立体的にとらえ、下記に示している（図2～5）を作成した。

横軸を感情と知識理解、縦軸を基盤となるものと表出されるものと設定し、奥行きを発達段階とした。それぞれの力の並びについても、検討を重ね、並び替えを行っている。第四の視点として『言語生活の広がり』がある。縦の積み重ねだけで、言語生活は広がっていかないと考えたからである。

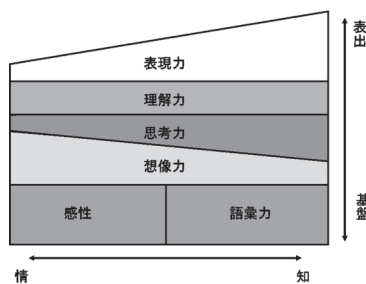
昨年度『情緒力』という概念の不明瞭さが議論となり、『感性』という言葉を選んだ。これは言葉に対しての感覚も含んでいる。そして、『語彙力』の重要性も確かめられた。この2つが子どもたちの言語生活を豊かにしていく上で重要な要素である。この部分が脆弱であれば、表出部分を支えることは出来ないのである。この『感性』と『語彙力』を基盤と捉えたことが、昨年度との大きな変更点である。



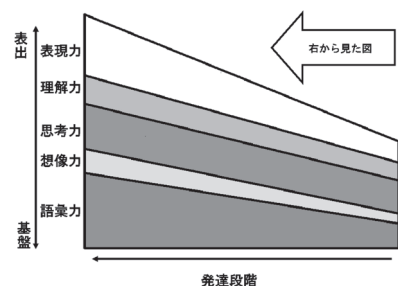
(図2) 上から見た図



(図3) 左（情の面）から見た図



(図4) 正面から見た図



(図5) 右（知の面）から見た図

(附属世田谷小学校 福田淳佑)

2. 2 古典学習の授業実践研究

2. 2. 1 中学校における研究の現状と課題

中学校では、国語の時間で行う古典学習は内容的にも時間的にも限られており、他の教科や領域に関連して学習することも古典学習の一つとなる。附属世田谷中学校では2年生の春に鎌倉遠足に行き、3年生の春に飛鳥、奈良、京都へ修学旅行に出かける。実際の見学もさることながら、各々で見学コースの設定や事前の調べ学習を行うことが、古典の世界に触れることになり、大きな古典学習となる。

1年生では「竹取物語」と川柳、2年生の鎌倉遠足をきっかけにした「平家物語」の学習、3年では「奥のほそ道」と杜甫や李白の詩などを関連させて学習している。古典を読むことで、日本の様々な文化を捉えることができる。生徒にとっては古文そのものを読むことが困難ではあるが、そのことで古典学習を嫌いにさせないようにしたいと考えている。1年生では「竹取物語」3年生の実践では、「奥のほそ道」の単元で、江戸時代初期の「旅」と現代の「旅」との違いを調べ学習を通して考えさせ、レポートにまとめた。このような古典の学習を通して、その時代の文化の一端を知ることになる。

膨大な古典を、折に触れ、学ばせることができるような学習単元を作成することが課題である。

(附属世田谷中学校 野中三恵子)

2. 2. 2 高等学校における研究の現状と課題

古典を学ぶ際においては、具体的なイメージができず、興味が持ちづらい、またそれぞれの教材を関連あるものとして意識しづらい等といった課題が挙げられる。それに対して、教材の組み合わせを工夫し、文化の流れを意識できるような実践を積み重ねて行きたいと考えている。

今年度の実践としては、漢詩と和歌を組み合わせた実践が行われた。また、来年度は『伽婢子』の「牡丹灯籠」と『剪灯新話』の「牡丹灯記」を比較して、それぞれの特質を見極めながら、作品理解を深めていく授業を行いたいと考えている。今年度の実践についての協議を通して、教材を比較することは、生徒にとって教材を読み解く観点が明らかになり、生徒の興味や関心を引き出すのに、かなり有効ではないかという手応えが感じられた。今後は、小学校・中学校・高校それぞれの段階においてふさわしい教材をさらに開発し、実践を体系化していくことが課題であると言えよう。

(附属高等学校 宇佐見尚子)

2. 2. 3 高校での古典学習の実践報告と課題

昨年度の段階で、高校での古典学習における課題として挙げられた事柄のなかに「日本における中国文学の享受のあり方に興味を持てるような教材の開発」がある。今年度の実践では、その点を意識した教材の開発と授業案の立案を目指し、和歌と漢詩を教材として『古今和歌集』の和歌と唐詩を比較しながら読むという授業を計画した。一口に「中国文学の享受」といっても、その方法・表象は様々である。今回の実践では典拠や翻案という直接的な関わりを持つ作品の読解ではなく、二国間の歴史的な背景に思いを馳せながら和歌や漢詩を読み、それぞれの文化においていかなる言葉で人々の思い・感覚が歌われるのかを捉え、そこに影響関係が見いだせないかどうかを考えるという活動を主眼とした。以下に授業の概要を述べておく。

単元名：和歌と漢詩に見る「秋」／教材：和歌 『古今和歌集』秋歌上 藤原敏行朝臣歌「秋来ぬと目にはさやかに見えねども…」他数首・漢詩「秋風引」（劉禹錫）・「汾上驚秋」（蘇頌）・「秋日」（耿湋）＊和歌と漢詩はすべてプリントにし、書き下し文や訓点の学習ができるようにワークシート化した。また、語釈の欄を設け、指導者側で数語の語意をあらかじめ挙げておいた。

学習目標：①和歌・漢詩それぞれに読まれている季節感を感じる。

②和歌・漢詩それぞれに読まれる季節がどのような言葉や表現によって効果的に表されているかを考える。

③『古今和歌集』成立の背景や唐と日本の関わりを考えながら、和歌と漢詩の影響関係について考える。

時間数：4時間（1時間目～3時間目：和歌の読解と漢詩の学習・表現の比較・書き下し文・訓点の付し方の学習 4時間目：古今和歌集の成立・唐との関わりから影響関係について考える。考えたことを発表し合い、意見を交換する。）

授業の実際から見えたこととしては、まず生徒の反応の良さが挙げられる。通常、和歌や漢詩の学習を進めるときには何を目標として読めばいいのか良く理解できないまま、教科書掲載の和歌や漢詩を読んでいる生徒も多い。今回の実践では、授業開始前にあらかじめ「比較」という視点を提示しておいたことや学習材として扱う和歌や漢詩が共通のテーマのもとに意図的に集められたものであったこともあり、生徒にとっては読解のための視点が明確になったのだろうと考えられる。また、二つ目には比較という視点が与えられたことによって、和歌・漢詩それぞれの学習も結果的に丁寧なものとなり、読解の深まりが見えたことが挙げられる。比較をする際、生徒たちはそれぞれの文学の形式や使用されている語句・登場する事物の一事に至るまでその違いや共通点を見いだしていこうとしていた。その作業が結果的にはそれぞれの歌・詩の読みを深める結果となったのである。そして三つ目にやはり日本と唐の文化交流・影響関係が読解の助けになったことが挙げられる。唐詩に読まれた季節感が日本の和歌に享受されていく歴史的な背景は、和歌に使用されている語（例えば「驚」）の意味を辞書的な範疇を超えて理解することに役立っていた。扱う教材の数や恣意的な教材の選別には問題が残るが、和歌や漢詩を何の観点も与えられないまま漫然と読む方法に比べて、生徒にとっては読む面白さを感じられる効果が見えた実践であったと思われる。

（附属国際中等教育学校 杉本紀子）

2. 2. 4 実践の課題と今後の展望

平成20年1月17日に出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」において明らかにされ、新学習指導要領に盛り込まれた「伝統や文化に関する教育の充実」が国語科の重要な課題となっている。小学校低学年から高等学校にいたるまで、発達段階に沿った形で古典の学習が行われることが求められている。その対応に向けて、古典の持つさまざまな要素をどのように捉え、どの段階でどのような教材によって、どのような指導法で児童生徒の学習活動を作り上げるのか、具体的な検討に迫られている。

本プロジェクトにおいて昨年度実施したアンケート調査により明らかになったことは、古典に関する知識が全体として乏しくなっていること、個人間の知識量の格差が大きいこと、したがって古典に関する知識が教室における共通理解事項とはなりにくいという実態であった。一方、本年度の高等学校における授業実践によって、生徒に中国古典文学と日本古典文学を比較する視点を与えることにより、生徒自身が興味を持って深く古典作品に向き合うことができることが明らかになった。

今後はこうした生徒の実態を踏まえながら、これまでの古典教材の洗い直しを含め、古典教材の持つそれぞれの性格や特色を明らかにし、相互の関係性（中国古典文学作品と日本古典文学作品、日本古典文学作品の後代への影響や展開も含む）にも留意しながら、小学校から高等学校までの展開を見据えた古典教材の開発をめざしていくことが求められる。

（大学 黒石陽子）

2. 3 現代文（文学・批評・論説）学習の授業実践研究

2. 3. 1 文章を比較する「情報の取り出しと枠組み」

互いの意見を比較したり具体的に考えていくときなど、観点や対照軸を明確にすることが重要になる。それを手がかりとし、感覚的に把握したものを具体化し根拠を提示することが可能になる。今回の授業では、文章から「情報」を取り出し図を用いて整理していくことで、論の観点を明確にしていく手がかりとした。その上で、取り出した「情報」やそのつながりから「枠組み」に注目し、観点をより具体化して捉えるように試みた。さらに、整理したものを比較することで、主点を明確にして内容を捉える言葉の力との連関を図った。段階的にこれらの活動を行うことで、論理的な構成や展開を踏まえて表現する力、具体的思考に発展すると考えられるからである。

また、「情報」の取捨選択・立体的な把握という点において課題が見出せた。今回、順を追って「情報」を取り出していくことには一定の達成が見られる。しかし、つながり方を考えたり、それを踏まえ具体的内容を考察する段階になると立ち止まる生徒が多い。これは文章内の語句や表現を同質・単線的に捉えていることが1つの要因と考えられる。よって今後は、表現形式への注目や語感の育成という観点からも考えを進めていく。

（附属世田谷中学校 渡邊裕）

2. 3. 2 批判的に読むークリティカル・リーディングのすすめー

今日、子どもたちが日常的に触れる雑誌やインターネット上の文章の中には、粗削りで瑕疵が目立つ文章が少なくない。情報自体の正確さという点での危うさを含む持つものや、論理的な問題点を含む文章が数多く存在しているというのが実状である。文化審議会答申の「これからの時代に求められる国語力」の一つに、「『事実』や『根拠の明確でない推測』を正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力」というものが示されている。文章を批判的に読み、確かな思考力をもって論理を的確に理解・判断できる能力の育成は、今後求められる国語力として重要なものであると考える。以上の観点に立ち、次の①②を指導目標とし、雑誌記事や新聞社説など4種の文章を教材として単元を構想した。

（指導目標） ①論理的文章を批判するポイントを学ばせ、適切な批判ができるようにさせる。

②文章を批判することで自らの考えを明確にし、思考を深めることができるようにさせる。

用語の適切性・主張と事例の適合性・論理展開の妥当性など、それぞれの位相における批判のポイントの検証、および、学習者の論理意識を育成するためのアプローチ法の開発を、次年度の課題とする。

（附属高等学校 仁野平智明）

2. 3. 3 「ホロコースト」の表象

私たちが何ごとかを他者に伝えようとする事、また、他者からの情報を受け取る事——ふだん何気なく行っているこのような営為について捉えなおしてみたいと考え、この単元を設定した（高校2年生1学期）。人間の「表象」行為について考察した文章である岡真理「虚構のリアリズム」（『記憶／物語』2000年 岩波書店）を主教材とし、その中で批判されているS・スピルバーグ監督の映画「シンドラーのリスト」と、スピルバーグとは対照的な方法論で製作されたC・ランズマン監督の「ショアー」を補助教材として扱った。

「アウシュビッツの後に詩を書くことは野蛮である」というアドルノの言葉に代表されるような、いわゆる「ホロコースト」の表象不可能性についてはつとに論じられてきたが、それぞれの方法論でこの問題に挑んだ二つの映画を実際に見ながら、人間の「表象」行為について、岡真理の文章を読み解きつつ生徒たちに考えさせたのである。

現在、高度情報化社会にあって、私たちの周りには現実そのものと感じられるような生々しい表象が溢れて

いる。透明なものとして受けとってしまいがちなこれらの「表象」に、あえて〈抵抗〉（ひっかかり）を設けることで、現代を生きるうえでの情報リテラシー、読解力を育てることができたように思う。

（附属高等学校 若宮知佐）

2. 3. 4 詩を味わう～萩原朔太郎「純情小曲集」

詩を鑑賞するということをねらいとして、中学2年生の2学期に授業実践を行った。これまでの単元の流れとしては、1年生の三学期の時点で、萩原朔太郎の「こころ」（『純情小曲集』より）と、それをもとにつくられた「テルーの唄」（映画「ゲド戦記」の主題歌）とを比較した。2年生に入ってから、新指導要領にあるように、「近代以降の代表的な作家の作品」をとりあげることを意識的に行い、1学期には「走れメロス」を、夏休みには「近代文学を読もう」という課題を設定し、継続的に近代文学に触れる機会をつくってきた。二学期は、自分が選んだ文学作品の読解と作家の追求を進め、ポスターにそのまとめを表現し発表し合う活動を行った。明治・大正・昭和の文学に少しでも触れたという経験を共通土台として、「詩を味わう」というこの単元を設定した。萩原朔太郎の『純情小曲集』の詩10篇を各4人グループで解釈・鑑賞した。詩人の人生観に触れる経験と、詩の鑑賞文を書くということから文学を批評する視点を養うことを目標とした。解釈を互いに発表して詩集への理解を深め、自分で「こころ」の詩をつくることをまとめとした。このような創作活動を取り入れることで、言語文化の継承や、豊かな人間性を養うことが可能な単元になったと考えている。

（附属世田谷中学校 扇田浩水）

2. 3. 5 文学者にとっての文学とは何か—歌人吉野秀雄にとっての短歌の意味合いを考える—

B2グループでは、「抵抗感」のある教材を開発しようということになったので、今まで教材としてほとんど使われたことのない吉野秀雄の歌を実践することにした。授業で扱ったのは、彼の第四歌集『寒蟬集』の「玉簾花」「彼岸」に収められた、妻はつ子との死別を詠んだ一連の歌である。初出は昭和21年12月に発表された「短歌百余草」である。その歌の中から二十首を選び、さらには学習者に吉野秀雄の歌をできるだけわかりやすく理解させるために、私自身が自主教材としてテキストを作成し、それに基づいて研究授業を行った。

前述した歌の中では、はつ子の入院から臨終に至るまでの妻の苦悩や、必死になって看病する夫や子ども達の様子が、張り裂けるような悲しみをこらえて、克明に歌われているのがわかる。それらの歌を通して、家族や夫婦はどうあるべきか。命や愛とは何なのかという問題をまず学習者に考えさせたいと思う。そして妻が亡くなるという火急の折に、なぜ歌人は歌を詠まなければならなかったのか。歌人にとって歌（文学）とは何なのかという問題にまで、内容を深めていった。今回の教材は2年生用に開発したものだが、思春期の彼等にとって最も大切なことは、深く自己を内省させることにあると思ひ、今回の教材を提案した次第である。

（附属高等学校 鈴木芳明）

2. 3. 6 現代文（文学・批評・論説）学習において検証すべき問題点

現代文グループでは、1年目に提案された新たな教材や単元構想を踏まえ、具体的な授業実践を通じて各教材の可能性を追求し、国語力の育成につながることを2年目の課題とした。価値ある〈抵抗〉をキーワードとして、論理的に整然とした文章や、一読してほぼ内容が理解できてしまう平易な文体の作品から離れ、一見理解が難しいと思われる教材をあえて導入し、学習者の読解力を切り拓いていくことを目標とした。上記の各報告の通り、これらの実践の試みは、それぞれ十分な成果をあげたと考える。

今後は、全体の国語力の理念を見すえながら、個々の実践を分析し、そこで獲得された学習者のことばの力を検証する作業が必要となる。具体的には、以下の問題である。

- 〈抵抗〉のある教材と出会った学習者の内部に、どのような葛藤が生み出されたか
 - 学習者は、教材をどのように理解し、その葛藤を乗り越えていったか
 - 学習集団における対話や討論の活動は、教材を理解する上でどのような役割を果たしたか
 - 教材のことばと格闘することによって、教材を生み出した文化・社会・歴史等への関心が生み出されたか
 - 教材の〈抵抗〉を乗り越えて理解へとたどりついたことの充実感が学習者にもたらされたか
 - ここで獲得されたことばの力は、通常の教科書教材を学習することで得られることばの力とどのような差異があるのか
 - ここで獲得されたリテラシーは、学習者の今後の言語生活にとって意義あるものとなり得たか
- これらの問題を検証する必要があるだろう。

(大学 千田洋幸)

2. 4 言語生活・言語体系の学習に関する授業実践研究

2. 4. 1 帰国学級における日本語教育について

『研究紀要』第35集で本学の北澤尚先生が指摘されているように、言語教育という観点からすれば、国語科教育の研究は、日本語教育や英語教育から学ぶべき点が少なくない。

例えば、「聞き取りテスト」である。説明文が音読される音声をメモをしながら聞き、聞き終わった後に解答用紙を開いて設問に答える、という中学校国語科のテストを見た（聞いた）ことがある。これは、いったい何の力を図ろうとしているのだろうか。聞くことの力には確かに話された内容を理解するという側面もあるが、このテスト問題の場合、聞き取る内容は日常生活や社会生活の中で話されるもの・ことでは決してない。

これに対して、地図を見ながら電話での相手の説明を聞き、これから自分が行こうとしている会社が1～4のどの建物に入っているのかを選ぶ問題（平成17年度日本語能力試験1級「聴解」設問15番）のほうが、よほど「実生活で生きてはたら」く（中央教育審議会答申、国語科の改善の基本方針、平成20年）国語の力を測るテストとして適切である。これはもちろん、一例に過ぎない。

日本語教育や英語教育を視野に入れつつ、一方で、理念的な言葉に踊らされずに具体的な授業実践から学校の国語科カリキュラムをどうつくっていくか、これは本プロジェクトの課題でもある。

(大学 中村和弘)

2. 4. 2 帰国学級における群読

(1) 日本語・国語教育としての群読の価値

附属大泉小の帰国子女教育学級（以下ゆり組）は、日本語にハンディキャップをもった児童により構成され、児童個々の日本語の習得状況や適応状況、言語環境も異なる。そのため、第1に、学習言語・生活言語としての日本語へ適応をはかる必要がある。そこで、ゆり組では、TTでの習得段階別学習（「個別学習」と呼称）の時間として、「日本語」・「計算」・「漢字」をそれぞれ週2時間ずつの計6時間をカリキュラムに位置づけている。第2に、児童自身が安心して日本語を介し、コミュニケーションするためには、個々の不安を取り除きながら、日本語に自信をもつことも必要となる。ゆり組では、毎日の宿題として①日記（「きろく」と呼称以下きろく）②音読（「たこチューカード」と呼称以下音読）の二つを行ってきた。しかし、この方法だけでは、個の適応ははかれても、学級として、あるいはゆり組全体としての学び合いはほとんど無く、集団の中で安心して、自信をもって日本語でコミュニケーションしようとする態度が、なかなか育たなかった。そこで、日々の音読と「日本語」をリンクさせて、ゆり組全体で楽しく学ぶ場を設定する必要があり、中でも児童にとって身近な詩を群読することが適切であると考え、本実践を行った。

(2) 日本語・国語教育としての群読の実践

第1に、個の学習から集団での学習へのステップとして、週2時間の「日本語」の時間と日々の音読、毎日15分の書写・漢字・計算のドリル学習の時間として位置づけられている時間（はげみ学習と呼称）をリンクさせながら、ゆり組全体で安心して、楽しく日本語を学ぶ時間を設定した。第2に、グループでの学び合いを通して、日本語習得をはかるため、日本語適応・習得状況を考慮して意図的に3グループに分けた。第3に、楽しみながら学ぶために、「なかなかほい」のバンブーダンスの活動や「アルプス一万尺」の手遊び歌の活動などから、「猫踏んじゃった」を節を付けて読む活動や「らいおん」をなりきって読む活動などへ、そして「ゆきがふる」で個々の適応状況に合わせたパートに分かれて読む活動へと、スモールステップでゆり組全体での群読へと発展させていくように活動を展開させた。

(3) 成果と課題

成果としては、一つ一つの日本語の学習がリンクすることで、活動へ取り組む意欲が高まって、読むことに不安を抱えている子が、きろくの中で「やってみたらおもしろい」とふりかえったり、家庭から「音読が楽しくなったようです」との声をいただいたりした。また、グループでの相談の時間を多く確保する中で、教え合いや相談の場面が増えて、「ここにセリフを付け足してみよう」「いいね」と、実践のねらいに合った児童の姿が見られた。

課題としては、普段会話のない児童同士のグループでも合ったため、教師が仲立ちをしないと進んでコミュニケーションがとれず、「この部分の読み方を工夫してみよう」など、児童の活動が、具体的な指示を受けての活動になってしまった。グループの構成や詩の選定など教師の思いだけでなく、児童の側にももう少しよった展開の工夫があってもよかったのではないかと考えられる。

（附属大泉小学校 岩浅健介）

2. 4. 3 帰国学級における「話す」・「聞く」

(1) 児童の実態と話す・聞く実践について

帰国学級の児童は海外において多様な言語や体験をしている。そのため、国語の学習を行う際には、児童一人一人の日本語の力を把握し、その児童に合わせた学習課題や目標を設定することが重要になってくる。

実態の把握については、週に6時間行っている個別学習での様子や、普段の学習、単元の導入部分で見取りを行っている。今回の実践でも、単元の導入部分で、相手に自分の話の意図が伝わらなかった例を児童から挙げる活動を行った。そこで共通した問題意識を持たせた。またその活動での話し方自体が相手に伝わる物になっているかという面からも、実態の把握を行った。

今回の実践では、第1に簡単な絵を見て言葉で相手に伝えるという活動を行った。その活動では、犬の絵からできるだけたくさんの特徴を挙げる活動を行い、その活動中で絵の説明に必要な日本語の語彙を獲得できること、目的によって話し方や内容の伝え方をふさわしいものに変えることをねらいとした。第2に、実際に相手に言葉で伝える活動を行い、上手に伝わったことと、伝わらなかったことを確かめ、伝えるためにはどのように工夫すればいいか、児童がお互いに気づいたことを発表した。そこで出てきた気づきを上手く伝える工夫として実際に使いながらも一度伝える活動を行った。

生活言語や学習言語を習得する意味では、個別学習で取り組むことで力を付けるという方法もあった。日本語としての形を教えることや表現の正確さを身につけさせるという意味では個別学習の有効性も捨てがたい。しかし、児童同士が学び合う中で試行錯誤していくなかでより生きた力になると考え、国語として行った。

(2) 成果と課題

絵をもとにコミュニケーションをしていく中で、児童からの気づきとして、相手のことを考えながら話す

こと、話す順番の大切さなどがあげられ、より相手に正しく、わかりやすく伝えようと意識して取り組むことができたことは成果であった。しかし、絵を言葉で説明するという活動では、感覚的な事柄を伝えたり、順序を伝えたりすることが難しかった。特に、説明する際の言葉を日本語ではうまく表現できず、英語で説明をする児童も見られた。絵そのものを説明する素材にするのではなく、絵を見る中で日本語の語彙表現が豊かになるような活動を行っていくほうが効果的であったと思われる。

また今回は、①目的に応じて伝える方法はわかっているが、伝える言葉が日本語ではわからない児童。②目的の伝え方自体がわからず、伝える言葉もわからない児童など、理解の支援のためにはどのような手立て、表現の支援のためにはどのような手立てという風に、より子どもの言語能力を細かく見て、手立てを定めていく必要があった。また、母語であれば一つの見方や言い方に縛られずに、もっと表現することができる児童もいたと思われる。母語で考えさせてから、その表現を認めた上で日本語での表現を教えるという方法をとった方が児童の実態に合っていたと思われる。児童 1 人 1 人の実態を把握し、個別の目標と細かな手だてが必要であることを改めて感じさせられた実践となった。

(附属大泉小学校 表賢司)

2. 4. 4 まとめと課題

今年度は大泉小学校の帰国学級で行われた日本語の指導に関する活動の検討を通して、国語力とはいかなるものかについての洞察を得ようと試みた。一般の国語教育では、日本語のいわゆるネイティブスピーカーを相手にする。しかし、従来は「国語力」を考える上で、ネイティブレベルになる以前の日本語習得段階があまり問題にされてこなかった。ところが、本実践の検討から次のことが浮かび上がってきた。日本語の習得状況に違いのある子どもたちを集団で指導しようとする場合、群読活動やコミュニケーション活動といった活動そのものが主眼となり、言語の能力はあくまで個別に発達していくものであるため、指導も個々になされていくということである。一般の教室で国語の指導を行う際にも、個別の言語発達という観点が不可欠であることが再認識させられる。たとえば大村はま氏の実践を代表とする座席表指導案などを念頭に置きつつ、言語指導を行っていくことが必要であろう。

(附属高等学校 浅田孝紀)

2. 5 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての授業実践研究

2. 5. 1 研究の方向

読書活動という行為を見える形にする「読書ノート」の指導は、読解力育成と読書活動を結びつけることにねらいがある。自己評価の題材としての「読書ノート」は、記録としての側面を活用している。それは、読書活動の広がりにつながる。しかし、相互評価（交流）の題材としての「読書ノート」は読書活動の深まりにつながる。「読書ノート」という具体物にすることによって、広がりや深まりが連動する。

自身の読書を「読書ノート」を通して振り返るとき、量的な変化（たくさん読んだ。もっと読まなくては。）を促すことができる。質的な変化としては分野の拡充（小説ばかりでなく、ノンフィクションも読もう。詩もおもしろいな。）や深化（もっとこの作家の本を読んでみよう。もっと詳しく調べてみよう。）が考えられるが、そのきっかけは周囲の読書に刺激されることが多い。周囲の読書活動を見える形にするものとして「読書ノート」が機能する。互いに「読書ノート」を読み合うことで、読書活動の意欲が喚起される。（自分も読んでみたい。）しかも読み方の違いや読みの深さに気づかされる。しかし、問題は「読書ノート」は「書くこと」という抵抗が大きい。目的や意図もなしに「書くこと」の継続は難しい。

このことは、さまざまな実践報告で指摘されてきた。本プロジェクトでは、当初から「交流」を目的に、自

身の読書活動を変容していくことを意図した「読書ノート」指導を構想している。そのために、中学校段階ではコンピュータ・ネットワークを活用した「読書ノート」を構想し「交流」の円滑かつ拡大をねらっている。「交流」を通して、何に気づいてどのような変容を遂げればよいのか、という教育的な目標設定にまでは至っていない。授業実践の中で実際に児童・生徒がどのような変容を遂げていくか、検証していくことで目標設定していくことができる。

(附属世田谷中学校 笠井正信)

2. 5. 2 世田谷小学校における読書ノートの取り組み

読書ノートの特性とは、書きたいと思ったときにいつでもどこでも書ける、日常性と、分類も含めた読書記録の蓄積であることである。週1回の提出時には、児童それぞれの読書傾向及び、進展具合、記述内容などを確認している。学校司書や保護者による読み聞かせてもらった本や、担任による読み聞かせて紹介した本を、読書ノートに書く時間を設けるなど、子どもの自主性にまかせるだけではなく、意図的に記録を積み重ねていく機会をつくっている。

多くの児童が熱心に読書ノートに取り組んでいる。その理由として入学時からの丁寧な読書指導とそれを支える読書環境が挙げられる。また分類も合わせて記述しているため、子どもたちが図書資料を活用する際には、素早く目当ての資料を探しあてることに役立っている。

読書ノートの活用を中心に据えた実践として、2年生が1年生におすすめの本を選んで読み聞かせをするという活動がある。子どもたちは自分の読書ノートから、おすすめの本を探した。その際に、ただおすすめの本というのではなく、読み聞かせをするということを意識させ、読み聞かせに適した本を考えさせた。

ここで読書ノートの記述と分類が役立った。それらは本選びの大きな助けとなっていた。記録の蓄積であった読書ノートが事典的な役割を果たしていたのである。この事典的役割を期待した取り組みとして、学級や学年でのブックリストづくりなどが考えられる。2年時の取り組みのように、対象を意識したものも出来るだろう。

(附属世田谷小学校 福田淳佑)

2. 5. 3 ORN の追加機能（オンライン読書ノート）

昨年度から開発を進めているオンライン読書ノートシステムについて、中学校における実用を念頭に、生徒の読書活動の促進を図ることを目的として、追加機能の検討を行った。目的実現のための手法として、生徒が互いにコメントを交わすことにより、読みたい本を見つけるきっかけとなる相乗効果を狙い、「コメント機能」を追加した。この機能の実装により、読書ノートに対してコメントを記述することができ、さらにコメントに対する返信のコメントも記述することができる。コメント欄には、コメント、その本を読んだ／読んでいない（ラジオボタンによる選択式入力）、記入者氏名（自動挿入。記入者の読書ノートへのハイパーリンクも自動挿入）の3項目を用意した。コメント入力の際に、システムは、登録日時、親記事のフラグ、既読または未読の情報、記入者名をデータベースに蓄積する。

読書ノートの公開およびコメント機能において、ネット上における不適切な発言を発端とするトラブルの可能性が予想される。これを回避するために、読書ノートおよびコメントに対して「教員チェック機能」を追加した。教員チェック機能は、生徒が入力したデータを即時公開せず、教員によるチェック後、他の生徒からの閲覧が可能となる機能である。読書ノートおよびコメントを入力した際に、システムは、教員チェックを「未チェック」の状態として、入力内容をデータベースに蓄積する。その後、教員は、データの公開可／不可を選択できる。教員チェックを行ったデータは、記入者からは編集不可となる。また、教員チェックを効率良く行うために、「未チェック」の読書ノートおよびコメントを一覧表示する画面を実装した。

(大学 宮寺庸造・附属世田谷中学校 鍋島尚子)

2. 5. 4 ORN（オンライン読書ノート）を使った中学校の実践

2. 5. 4. 1 1年生での学習

1年生ではオンライン読書ノートを使った学習を3回行った。3冊の本について入力を行った、1冊は言語に関する本である。1学期に教科書教材で単元「言葉を考える」学習を行った。『言葉は変わっていくけれど』（清水義範）『テレビ言葉の「聴き方」』（梶原しげる）『今どきの言葉づかい』（金田一秀穂）の読解が中心ではあるが、自分たちの日常的な言語生活と比較して、「言葉づかいの問題点」について考えた。教材で例にあがっている現実と中学1年生の子供たちの現実には大きな差があるが、ことばを考えるきっかけとなった。そこで、更に言語について関心を持ってもらうために、言語をテーマにした本を一冊読ませる事にした。司書に500冊にのぼる本を用意してもらい、生徒は自分の選んだ本を1冊読めるようにした。

情報カードに、題名、筆者、出版社、発行年月日、選んだ理由、簡単な内容、感想、キーワード（3つ）を記入させた。これらを、オンライン読書ノートに書き込むことにした。1年生全員で日本語をパソコンに入力することはやっておらず、どの程度パソコンに慣れているか実態がつかめていなかった。一方で、携帯電話でのメールのやり取りは多くの生徒が日常的に行っていることは分かっていたため、パソコン入力が学習であることを自覚させるため、予め書いたものを入力することにした。他の2冊は、自由読書からのものである。

実際の入力では、個人差があり、時間がかかった。入力が困難だった項目は、読み方が分からない筆者の氏名であった。3冊分の入力で徐々に慣れてきたようであった。次に、友達が書いたものを画面上で読み、友達に対して感想や質問を書き込んだ。書かれた生徒は、その感想や質問に対して回答を入力した。この時は、予め感想を紙に書くのではなく、画面を読んで直接入力した。生徒が書いている内容を同時進行で、教師が読めることを知らせなかったクラスは、記号、いわゆる顔文字等の混ざったおふざけの感想も出てきた。その場合は、日常携帯電話でのメールで行っていることではなく、学習としてきちんと書くことを伝えて書き直させたりした。

直接入力になると、日常の携帯電話を使ったメールの書き方が出るようだが、すぐに直すことができることもパソコンの良いところであろう。生徒はお互いに読み合って、自分の文章に友達の感想を書いてもらうとに素直に喜んでいて、ただし、生徒が書いたものを他の生徒がすぐに読めるのではなく、教師が先に別の画面で読み、教師の許可がでて初めて他の生徒が読めるのである。したがって、40人の書いたものを人数の数倍の回数教師が読み続けなくてはならない。

表現指導の課題である。文体、文章表現の問題については、考える価値はあると思うが今後の課題にしたい。

（附属世田谷中学校 野中三恵子）

2. 5. 4. 2 2年生、3年生での学習

オンライン読書ノートを使った授業を世田谷中学校の2年生では3回、3年生では1回行うことができた。2年生の授業で行った活動を中心に、実践の成果を報告していきたい。

第1回目の授業では、授業で読んだ太宰治の「走れメロス」について、感想を書き込んだ。そして小説の中で一番印象深かった人物をキーワードから選び、自分と同じような感想をもった人が何人くらいいるのか検索を行ったりした。授業の感想からは、積極的に継続してノートを書き込んでいきたいという意見が多くみられた。読書記録の蓄積としてだけでなく、情報を共有するという面白さを味わうことができたのではないかと考えている。2回目の授業では、各自が1冊「近代文学を読もう」という取り組みから選んだ文学作品について、感想を書き込んでいった。読んでいる作品が全員異なるため、160名の生徒がどのような作家・作品を読んだのか一覧にしてすぐ検索でき、人気作家の傾向を調べたり、読書の情報発信の場として活用することができた。3回目の授業では、感想の交流を目的としてシステムを利用した。生徒が前回入力した近代文

学の感想と、課題として書いた「近代文学ポスター」の両方を読み合い、オンライン読書ノートやポスターに書かれた情報を読みとって、書き手にコメントを送った。自分の書いた感想やポスターの情報を、読み手がどのように受け取ったのか知ることができ、また作品や作家についての新たな情報を交換し合うこともできた。記録を情報として交流し、本の感想を共有することにより、読書への関心や、作品への理解を深めることができたと考える。

自主的に読んだ本の記録は自分のものとして蓄積する一方で、国語の授業に応じて課題を設定したものについては情報交換の場を利用していくといった、複数の応用の実践ができた。そのことによって、一人の読書からだけでは得られない、感想の深まりや、読書の幅の広がりを見出すことができた。

(附属世田谷中学校 扇田浩水)

3. 今年度の成果と今後の課題

本学の附属小学校・中学校・高等学校、外部の私立小学校の教員と本学学部の教科教育学及び教科専門担当教員とが連携し、「国語力」向上を図るカリキュラム開発に取り組む附属学校研究会プロジェクト研究の第2年次の報告である。研究の目的はもちろん「国語力」向上を図るカリキュラム開発であるが、そのカリキュラムを教員養成や現職研修のカリキュラムに関連付けることまでも視野に入れた研究である。

昨年度の第1年次は、各グループごとに先行研究や実態調査等を基に、「国語力」を分析し、「国語力」という観点から児童・生徒の課題を捉え、教材選定、単元構成などの授業実践を構想した。

本年度は、それらを踏まえて各グループが授業実践を公開した。言わば「国語力」向上を図る国語科カリキュラム作りのための授業実践である。さらに、そこから顕現化した「国語力」向上のための課題を各グループごとに検討した。学力・評価グループは、「国語力」の構造を立体的に捉える方向で改良を加えた。「語彙力」と「感性」とを全ての国語力の基盤とし、想像力・思考力・理解力・表現力を発達段階に応じて知の面と情の面とから位置付け、さらに言語生活の広がりをも視覚化できるようにした。古典グループは、『古今和歌集』と唐詩とを比較しながら読む実践。比較という視点から読み比べることによって、和歌や漢詩を読むおもしろさを実感した。現代文グループは中学校と高等学校において価値ある〈抵抗〉をキーワードとして一見理解が難しいと思われる教材をあえて実践。具体的には、新聞記事を比較しての情報の取り出しと枠組みの追究、雑誌記事や新聞社説の批判的な読み、「表象」行為への〈抵抗〉を意図した岡真理「虚構のリアリズム」の読み、萩原朔太郎の詩を味わう、歌人吉野秀雄の短歌の意味合いを考える等々。学習者の読解力を切り拓いた。言語生活・言語体系グループは、帰国学級における群読の実践、さらに音声言語コミュニケーションに関する実践を行い、読書活動・情報活用グループは、小学校では読書ノートの取り組み、中学校では ORNS（オンライン読書ノート）を活用した実践を行い、ORNS 導入の効果と指導上の課題とを明らかにした。

今後の課題は、「国語力」の構造を明確にし、国語力向上と国語科教師の専門的力量的の中核である授業力との関連についてのさらなる検証を行うことである。その解明が、教員養成や現職研修のためのカリキュラムと関連付けるための鍵となるであろう。

(大学 大熊徹)